

ことばの迷い道

「わたしこそ、ありがとう」

おかもと まり
岡本 真理

大阪大学教授

新しい外国語を学び、そのことばを上手に話せるようになりたい、と強く思ったとき、みなさんならどのような勉強の工夫をするだろうか？ 現地の友人を作って会話をし、映画やドラマを、^{せりふ}台詞を暗記するまで繰り返し見る、などがあるだろうか。わたしはハンガリー語というちよつとめずらしい言語に大学生のころに出会い、結局それを研究・教育することを職業としてこれまでやってきた。今振り返って、ハンガリー語会話をどのように身に着けたのか考えてみると、留学時代の知人友人との交流はもちろんだが、それより強烈な記憶は「ケンカ」なのである。

タクシートの運転手と、レストランではウェイターと、郵便局や旅行社、駅の切符売り場の係員と、列車に乗れば切符をめぐって検札員と、さらに査証をめぐって国境警備員と……など、これまでいろいろな場で口論になることがあった。タクシートの改造メーターの料金が見る上がり続ければ、「ちよつとこのメーターおかしいよ。前に乗ったときはこんな高くなかった。なんで赤信号でこんなに上がるの」と文句を言わないといけないし、頼んでもいないサラダが運ばれ、その料金を請求されたりすると、「これは頼んだ覚えがない」と主張しなくてはならない。すると、「おかしいなあ」ととぼけた運転手はメーターをバン！と叩き、その衝撃で表示はゼロにリセットされ、目的地に着いたころにはちよつとよい料金となるのだ。食べてしまったサラダのことを「セットだと思ったから食べたんだ」「セットなんてありません、払ってく

ださい」とウェイターとエンドレスの言い合いになったときは、横で見ていた家族が「もういいじゃない、食べちゃったんだから払っても」とさすがにあきれ顔になった。わたしは元来どちらかというとぼーっとしたのんびり屋だったが、ハンガリー留学を境に、やや攻撃型の人間に生まれ変わったかもしれない。ただ、当時まだ社会主義国から体制転換を果たしたばかりの混乱した社会で、覚えたてのハンガリー語で全身全霊を傾けて自己主張し、ときに勝利をつかみとり、ときに涙をのむことで、わたしのハンガリー語会話が格段に向上したことは間違いない。

「お・も・て・な・し」が自慢のどこかの国とは違い、一九八九年まで社会主義国であったハンガリーは、お世辞にもサービスが行き届いた社会とはいえない。スーパーのレジ係の「商品売ってやる」という態度、客の「ありがたく買わせていただく」という態度は、残念ながら一朝一夕には改善しない。レジの会計が終わると、まず客が「ありがとう」と言い、これに答えて店員が「わたしこそ、ありがとう」と言うのが一般的である。しかし、これに慣れてしまうと、日本のスーパーで店員ばかりが一方的で過度に丁寧なサービスを提供し、客はそれを当然のことのように無反応な態度でスルーする光景が、逆に異様に思えてくる。客も店員も同じ人間だ。店員の「わたしこそ、ありがとう」のことは、かえって平等な人権をもつ者同士の、互いを尊重し合う響きを感じるようになってきたこのころである。